

# 「怪談実話」作家の幽霊観 The Ghost Views of “Real Ghost Story” Writers

伊藤 慈晃  
ITO Shigeaki

This study examined whether it is appropriate to analyze “real ghost story” writers as practitioners of spirituality in Japan. Analysis of magazines focused on ghost stories revealed that real ghost story writers have the “weak ghost” views, as opposed to the “strong ghost” views reported by television psychics.

キーワード：怪談実話 (Real Ghost Story)、テレビ霊能者 (Television Psychic)、幽霊観 (Ghost View)、スピリチュアリティ (Spirituality)

## 1. はじめに

本稿の目的は、2000年代以降の幽霊観について、特に「怪談実話」といわれるジャンルの作家たちが、どのような幽霊観を持っているのかを明らかにすることである。これにより、2000年代以降の幽霊観が、1970年代以降の心霊ブーム期の幽霊観とどのように異なっているのかを考察する。なおここでの幽霊観とは、幽霊や霊魂といった目に見えない霊的存在に対する認識を意味する。

これまで大衆文化における幽霊観については、「テレビ霊能者」が注目されてきた。「テレビ霊能者」とは、霊視のような超自然的な力を持つという霊能者の中でも特に、マスメディアを通じて積極的に情報発信をする者を意味する。「テレビ霊能者」は1970年代以降の心霊ブームの中から誕生した。小池靖 (2007 a) は、「テレビ霊能者」が「六星占術」、「オーラ」といった各々のキャッチコピーを駆使し、霊的存在の持つ影響力を理由に、他者の人生について断定的に語るという特徴を明らかにした。松浦由美子 (2006) は、こうした霊的存在の持つ力を絶対視し他者への優位性を保とうとする姿勢に、宗教的な概念を濫用した暴力性を見出し、強く批判している。

もっとも2000年代後半ごろからは、テレビ番組の放送倫理に対する批判が強まってきた (斎藤 2016)。こうした潮流の中で、テレビ霊能者が出演する番組は近年ではほとんど見られなくなったようである。他方で、テレビ霊能者を中心とした心霊ブームが過ぎ去って以降、変化が生じたのが怪談と呼ばれる文芸である。中でも、「怪談実話」と呼ばれるジャンルは、一般人の体験談の取材を通して創られた物語であり、それらは心霊ブームの頃に流通していたような「ほんとうにあった怖い話」の延長として位置付けることができる<sup>(1)</sup>。しかし、「怪談実話」という呼称の提唱者である東雅夫 (2009) は、70年代から90年代にかけて流行したものは「怪奇実話」として、叙述スタイルや蒐集された話の質から「怪談実話」とは区別している。

## 2. 分析対象

本稿で分析対象とした資料は、怪談専門誌『幽』に掲載された怪談作家の対談記事である。『幽』は2004年に創刊された怪談専門誌であり、総合文芸誌『ダ・ヴィンチ』増刊として現在まで年2回のペースで刊行、2017年現在、27号まで発刊されている。版元は創刊号から2013年の19号までは株式会社メディアファクトリー、以降は株式会社KADOKAWAとなっている。150mm×210mmの菊版で、各号350ページから450ページ前後となっている。編集長（KADOKAWAより発行後は編集顧問という役職名に変更）は近年精力的に怪談系の書籍を刊行している東雅夫である。主なコンテンツとして、怪談作家による小説や漫画の掲載や、怪談に関連する学術研究の発表、ブックレビュー、一般人から怪談を募集して優秀作品を決定するコンテストなどが挙げられる。発刊の経緯について東（2011）は「怪談之怪」という企画がきっかけだと述べている。「怪談之怪」は、東雅夫、小説家の京極夏彦、怪談実話の代表といえる『新耳袋』の著者である木原浩勝、中山市郎、の4名による企画で、『ダ・ヴィンチ』の誌上で怪談愛好家を招いたインタビュー記事を掲載していた。この企画が独立して、上述の4名に加え、加門七海、安曇潤平、小野不由美ら、怪談作家を中心としたコンテンツが提供されることで、『幽』が創刊された。

『幽』の研究対象としての特徴は、『幽』という雑誌自体が、怪談を心霊ブームの頃に流行した質的にもテクニク的にも粗悪な「怪奇実話」ではなく、文芸の一つとして捉えようとする点にある<sup>2)</sup>。「怪談実話」作家は、「テレビ霊能者」と同様に霊的存在に言及しつつも、「作家」として自身を規定している。それゆえ『幽』のような、怪談の文化的地位を向上させようとする側面の強い雑誌を分析することは、霊的存在に言及しつつもその点以外に自身の価値を見出しているというスタンスが、幽霊観にどのように影響しているのかを明らかにできる。そこで、本稿では『幽』に掲載された「怪談実話」作家のインタビュー記事を中心に分析していく。

## 3. 分析

「怪談実話」作家の幽霊観について、結論から言えば、彼らは霊的存在について、「目に見えない」から畏怖の対象となるのではなく、「目に見えない」弱い存在だという認識を共有しているということである。以下でそのことについて検証していく。

まずは、「怪談実話」の代表ともいえる稲川淳二から確認してみたい。稲川は加門七海との対談の冒頭で、自身の幽霊観についてこう述べている。

私は霊を信じない人間じゃないんだけど、違うものは違うとわりと冷静に判断するんです。（中略）自分自身としては「あるな」とは思うけれど、「稲川さん、いるんですか、いないんですか？」と聞かれても、私は決められないですね。（『幽 Vol.2』2004: 133）

稲川は、自身は霊を信じない人間ではないと、消極的にだが肯定している。ただし、「いるかないか」、ということには決められないという。つまり、個人的な問題として霊の存

在については肯定しているが、それを他者と共有できるような形で断言する、ということについては慎重であることが分かる。

次に、靈感はない、つまり自身で霊を知覚することはできないが、霊的存在を信じているというケースとして、「怪談実話」作家の工藤美代子の発言から確認してみたい。以下はインタビューの冒頭での工藤の一言である。

誤解しないでほしいのは私には一切靈感がないということ、むしろ、今まで徹底してそういうものを遠ざけてきました。もっと過激にいつてしまえば、靈感なんて信じている人はちょっとコワイ。どっぷりその世界に浸かっている人は気持ち悪いとすら思います。(『幽 Vol.4』2005: 312-3)

ここで工藤は靈感についてはないということを明言している。更に工藤自身は、靈感や霊的な世界を妄信する人に対しては明確な拒否感を表明している。こうした発言には、「怪談実話」作家だから霊を信じているというレッテルに対する苛立ちが伺える。しかし、靈感がない、つまり霊的な存在を知覚することはできないにしても、霊の存在自体については肯定している。

私には靈感はないけれど、「あっちの世界の人」がいないとは思わない。もしいたとしても、彼らが人間に危害を加えるケースってほとんどないのではないかと思います。多分、自分の存在を認めてほしいと思っているんじゃないでしょうか。だから時には悪さもするけど、基本的には優しいはず。あっちの世界の人とこっちの世界の人と同じように接するのが正しいのだと思いますよ。ただ単に「出る」というだけでお祓いするなんて、もってのほかでしょう。それじゃああまりにも可哀想ですよ。(『幽 Vol.4』2005: 313)

ここで工藤の想定する霊的存在は、ただの「目に見えない」存在として語られている。そして「あっちの世界の人」は、存在を認めて欲しくて時には悪さもするが、基本的には優しいはずだから、「出る」というだけでお祓いをするということは可哀想なのだという。つまり、工藤にとって霊的存在とは、「目に見えない」憐れむべき存在なのである。とはいえ、自身で見ることでできない存在について、なぜ肯定することが可能となるのか。

そこで以下では、靈感があると公言している加門七海と、同じく靈感があるという立原美幸の対談から、より明確な霊的存在への認識について探っていく。立原は小学5年生頃から急激に霊を見るようになったという。そのことを心霊好きの父に相談した時のやり取りについて語ったものである。

「いるものはいるんだから」と父に言われて、素直に「そうか、いるものはいるんだなあ」と思ったら怖くなくなった(笑)。まあ害がなければいいかって。それは今に至るまでそうですね。(『幽 Vol.7』2007: 167)

立原は、霊が見えることについて恐怖を感じていたが、「いるものはいる」と言われて

以降、恐怖感がなくなったという。さらにまた、恐怖心がないゆえ、基本的には除霊などは一切行わないのだと語っているのが下記の部分である。

お坊さんが言うには、すごく執着するようなタイプの人には執着するものがくるけど、私のように執着しない人には、入れ替わり立ち替わりでくるけど、あまり悪くはないと言われて。なので「そっか」と、そのまま（笑）。(『幽 Vol.7』2007: 167)

こうした発言からも分かるように、立原が霊的な存在を見えるということについて特別何か拒否感をもって除霊することなどは行わない。霊が特別な力を持っているという認識はなく、あくまで放っておこうというスタンスを持っていることが分かる。こうしたスタンスについて加門はインタビュー後の感想で以下のように述べている。

いるものはいる。無視する。お祓いはしない。それでいて、実は怖いモノ好き——というスタンスが、自分とよく似ているのだ。「害がなければいい」という考え方もそっくりだった。普通に生活していく上で、見えるモノは日常生活の一部に過ぎない。私達が雀や鳥を一々気にしないのと同様に、ほとんどは無視して過ごすだけ……。(『幽 Vol.7』2007: 173)

ここで加門は、霊的存在について、「日常生活の一部に過ぎない」と述べている。興味深いのは、雀や鳥を一々気にしないのと同じだと述べている点である。こうした霊的存在を動物の延長として捉える考えは、工藤のように目に見えなくてもいるという一見矛盾する態度がなぜ可能なのかを明確にしている。つまり、彼女らにとって、霊的存在が実在するというこの感覚は、目には見えない微生物の存在を肯定するようなものなのである。しかし、霊的存在は微生物と違い感情を持っている。こうして目に見えない霊的存在は憐れむべきだという工藤のような考え方が可能となるのである。要するに、霊的存在とは極限まで存在感がなくなった人間とほぼ同義なのだ。

#### 4. おわりに

本稿では、「怪談実話」作家の幽霊観について分析してきた。心霊ブーム期の幽霊観は、霊的存在は「目に見えない」＝「見えない力」を持った畏怖すべき対象だった。だからこそ、テレビ霊能者はそれらを知覚できるということを理由に、他者の運命や人生について断言することが可能だったのである。いわば心霊ブーム期の霊的存在は、「目に見えない」ということに極限まで意味づけを加えられた存在だったといえる。

それに対して本稿で明らかになったことは、「怪談実話」作家にとっての霊的存在は「目に見えない」ということが、存在感の薄さとほぼ同義に捉えられ、憐れむべき対象として認識されているということである。心霊ブーム期の霊的存在が「強い幽霊」だとしたら、「怪談実話」作家にとっての霊的存在は、その意味を極小まで抑えられた「弱い幽霊」だといえる<sup>(3)</sup>。こうした「弱い幽霊」観が成立するのは、「怪談実話」作家が霊的存在を知覚できるかどうかという点ではなく、作家としての技量という点で自己を規定しているからだ

と考えられる。ただし、本稿では「弱い幽霊」観が形成されるにいたった歴史的・社会的背景、また「弱い幽霊観」がどの程度一般性を持つかは明らかにできていない。そうした背景を明らかにする過程で、「弱い幽霊」観がスピリチュアルな文化の中で果たしている機能を明らかにすることが、今後の研究の課題といえる。

註

- (1) 1990年代以降の、心霊系の「怖い話」や怪談の流行については、奈良崎英穂（2005）を参照されたい。
- (2) 例えば、『幽』怪談大賞」というコンテスト開催に際して行われた、「怪談之怪」の4名による対談の中で京極夏彦は「僕らが「怪談、怪談」といつてきたおかげで、怪談というジャンルが一種のブランドとして認められてきたという印象はある」（『幽 Vol.4』2005: 295）と述べている。また、木原浩勝は「怪談をやりたい人の数は増えているかもしれないけれど、何をどうやればいいのかという段階まではまだ至っていない。」（『幽 Vol.4』2005: 295）と現在の怪談という文芸の現状を認識している。こうした発言からは彼ら「怪談之怪」のメンバーが、怪談というジャンルの文化的な地位を向上させようと努力してきたことがうかがえる。
- (3) 「強い幽霊」観、「弱い幽霊」観という用語は小池（2007b）の「強い自己」、「弱い自己」という用語に着想を得た。小池は自助グループなどのセラピー文化には、無垢で純粋な「弱い自己」を守り、回復しようとする価値観が通底していることを明らかにしている。

参考文献

- 東雅夫, 2009, 『怪談文芸ハンドブック』メディアファクトリー.
- 東雅夫, 2011, 『怪談はなぜ百年ごとに流行するのか』学研パブリッシング.
- 小池靖, 2007a, 『セラピー文化の社会学—ネットワークビジネス・自己啓発・トラウマ』勁草書房.
- , 2007b, 『テレビ霊能者を斬る—メディアとスピリチュアルの蜜月』ソフトバンククリエイティブ株式会社.
- 松浦由美子, 2008, 『『たたり』と宗教ブーム—変容する宗教の中の水子供養』『多元文化』名古屋大学, (8), 65-78
- 奈良崎英穂, 2005, 「心霊からウィルスへ—鈴木光司『リング』『らせん』『ループ』を読む」—柳廣孝・吉田司雄編著『ホラー・ジャパネスクの現在』青弓社, 75-86.
- 斉藤誠子, 2016, 「日本のテレビ番組に対する批判の類型—BPO に寄せられた視聴者意見の分析」『人間と社会の探求』慶應義塾大学, (82), 75-92.

